

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録 (2013.12) 平成24年度:39～40.

看護診断の活用を推進する教育担当者の学習ニーズ

伊藤廣美 三浦美佳 貝谷沙織 安田明日美

看護診断の活用を推進する教育担当者の学習ニーズ

○伊藤廣美 三浦美佳 貝谷沙織 安田明日美

旭川医科大学病院 看護部

1. はじめに

看護情報の電子化と看護診断を先駆的に導入してきたA病院では、看護の質向上に向けデータ蓄積と二次利用にも取り組んでいる。しかし、看護師個々の看護診断用語の理解と活用できる能力によって、実践データとしての価値が左右されるため、臨床での継続的な看護診断能力育成が重要となる。特に教育的かかわりの中心を担っている教育担当者の育成が鍵となることから、学習ニーズに対応した支援をしていくことが効果的と考える。そこで今回、看護診断の活用を推進することを目的に、教育担当者自身の課題を明らかに、その内容をもとに学習ニーズを検討した。

2. 研究方法

- 1)対象:外部講師による3段階の看護診断研修(1回7.5時間計3回)全てを修了した教育担当者40名
- 2)データ収集方法:研修前の自己の考え、疑問に対して、研修後に得た解答について自由記載とする。
- 3)分析方法:研修後に教育担当者自身が得た解答の中で「気づき・課題」の記述の単文を抽出し、類似性・相違性に基づき統合、比較検討、再編を繰り返しカテゴリー化した。
- 4)倫理的配慮:協力者に研究目的および匿名性を保持すること、目的以外でデータを使用しないことを口頭と文書で説明し、参加の同意を得た。

3. 結果

1)対象の概要

臨床経験年数5年以上10年未満8名、10年以上15年未満14名、15年以上16名 計38名

2)分析結果

単文130、サブカテゴリー18、カテゴリー5が抽出された。以下、カテゴリー【 】、サブカテゴリーを<>、単文を「」で表す。

【アセスメントの偏りを修正していく】

診断プロセスを振り返り「関連因子や危険因子を当てはめて診断する」「必要と考える介入から診断を探していた」「家族という言葉が含まれている診断名を安易に選びがち」など<パターン化した診断の当てはめ>を自覚し、「自分の思いのみで診断していた」「患者との日々のかかわりの中で思いを聞いて診断したい」など<看護師の一方的な考えでの診断>を認識していた。また「このような場合はこの診断と決めつけていた」「疾患や状態でひとくくりせず一人の人間として診断する」と<疾患や状態からの診断の決めつけ>や「病とともに生活している患者という視点の不足」「訴えを十分に引き出さかかわりからのアセスメント」など<患者の背景をふまえたかかわりの不足>を述べていた。さらに「診断指標・関連因子について焦点アセスメントの不足」など<診断の裏付けとなるアセスメントの不足>を補うために、「複数の人の意見を聞き多角的に患者をとらえる」「SOAP記録で情報を共有する」など<多角的に患者をとらえ情報を共有する>ことと、「ある一定の日数で区切りをつけてアセスメントする」など<評価していくという視点>につなげていた。

【看護独自の介入で可能なゴールを見据える】

「最終的なアウトカムが何かと考える診断する」「好ましいアウトカムが得られる診断をする」など<

アウトカムの設定を踏まえて診断する>、「看護独自の介入によって問題が解決されなければ診断できない」など<看護独自の介入でゴールを目指す視点>の重要性について述べていた。

【看護診断から目標、介入を導く】

<看護診断から目標、介入を導く>では「診断時のアウトカムは、診断指標の軽減、緩和、維持に向け設定する」「診断の目標に向かい関連(危険)因子に働きかける看護介入とする」などが含まれていた。

【活用する診断概念の学習への意欲】

「概念理解することで患者問題に最も効果的なケアを選択し提供できる」<看護診断の概念学習に基づいた効果的ケアの提供>のために「部署で使用頻度の高い診断名から概念学習する」「概念学習をすすめアセスメント力を深めていきたい」など<所属領域で活用する診断の概念学習の意欲>を述べていた。また、「スピリチュアル・アセスメントを行うことで、ターミナルの患者を持つ家族を理解できた」「根拠がオレム・セルフケア不足理論にあり概念や理論の重要性を学んだ」など<診断の背景にある理論を学んだ>と述べていた。

【教育担当者としての指導力向上】

「チーム全員で患者理解を深め個性のある計画立案をスタッフに伝え浸透したい」「実際に困っている事例から検討会・カンファレンスをする機会を設ける」「診断が正解か不正解かではなく、基盤となる知識とアセスメント力を深めたい」など<実践のなかでの教育的かかわり>と「モチベーションをあげ学習を継続していくために資源を活用する」「スタッフ全員で学習を深める機会をつくり自分が学習してきたことを活かしたい」など<チーム全体で学習する場作り>が述べられていた。

4. 考察

1) 自己の傾向に気づきアセスメント力向上に向けた学習

【アセスメントの偏りを修正していく】には、<パターン化した診断の当てはめ><看護師の一方的な考えでの診断><疾患や状態からの診断の決めつけ>による習慣化した手順や患者の疾患に介入するという自己の傾向を省察していたと考える。そこから<多角的に患者をとらえ情報共有する><評価していくという視点>の見直しを図ろうとしていた。小田¹⁾によると、看護過程の重要なスキルであるクリティカルシンキングにおいて想起、習慣、探求、創造性があり、探求によって自分の思考様式を知り見直しを行うとしている。教育担当者は自己の傾向を知ることで見直しを図るための学習ニーズを明らかにしていたと考える。

2) 看護診断と目標、介入を連動させ、ケアの質向上を目指す学習

【看護独自の介入で可能なゴールを見据える】
【看護診断から目標、介入を導く】ためには、【活用する診断概念の学習への意欲】を持ち看護診断を活用させる能力向上を目指していると考え。自ら学びながら<実践のなかでの教育的かかわり><チーム全体で学習する場作り>を通して【教育担当者としての指導力向上】に向け役割発揮のための学習意欲が高まったと推察できる。

このことから、教育担当者自身の思考過程の見直し、および実践力と指導力向上への意欲が学習ニーズを生じさせていると考えられる。このような教育担当者の学習ニーズは、今後の看護診断活用の推進に大きく影響していくものと考え。

引用文献

1)小田正枝:看護診断を支える看護過程論 看護過程成立の基盤となるもの. 看護診断, 9(1);19 -20,2004